

2022 年 11 月 11 日

## 学位申請論文審査報告書

学位申請者 金子直也（学生番号 G9D1012019）

申請学位 博士（経済学）

論文題名 モロッコにおける国民統合の土壌～独立にいたる社会の変容とベルベル人

Background to the Unification of People in Morocco:  
Berbers during the Social Transformation to Independence

審査委員

主査 拓殖大学教授 立花亨

副査 拓殖大学名誉教授（イスラーム研究所長） 森伸生

副査 拓殖大学教授 松井謙一郎

# I 論文の視座と独自性

強権的権力が多く度々政治不安が現実化した中東地域にあって、1956 年の独立以来モロッコは、政治的安定を基盤に漸進的な政治面の改革・近代化を印象づけてきた。2010 年に始まるアラブの春の影響は免れなかったものの、モロッコでは政権が揺らぐような事態が出来ることはなく、むしろそれを通して政治的な近代化には拍車がかかった。英エコノミスト・インテリジェンス・ユニットによる民主主義指数によっても、アラブの春とその後の政治的混乱を受け、中東では民主主義の度合いを低下させたり、ほとんど変化させない国が大部分を占めた中、モロッコはチュニジアと並んで群を抜いた民主化の進展ぶりを示した（下表）。

表 EIU 民主主義指数にみる中東諸国(2010年及び2021年)

	2010年		2021年		2021-2010
参考	日本 8.08		日本 8.15	完全なる民主主義 (8.00-10.00)	0.07
1	イスラエル 7.48		イスラエル 7.97	欠陥ある民主主義 (6.00-7.99)	0.49
2	キプロス 7.29		キプロス 7.43		0.14
3	レバノン 5.82		チュニジア 5.99	混合体制 (4.00-5.99)	3.20
4	トルコ 5.73		<b>モロッコ 5.04</b>		<b>1.25</b>
5	パレスチナ 5.44		トルコ 4.35		△ 1.38
6	イラク 4.33		モーリタニア 4.03		0.17
7	クウェート 3.88		パレスチナ 3.94	権威主義体制 (0.00-3.99)	△ 1.50
8	モーリタニア 3.86		クウェート 3.91		0.03
9	<b>モロッコ 3.79</b>		レバノン 3.84		△ 1.98
10	ヨルダン 3.74		アルジェリア 3.77		0.33
11	バハレーン 3.49		カタール 3.65		0.56
12	アルジェリア 3.44		イラク 3.51		△ 0.82
13	カタール 3.09		ヨルダン 3.49		△ 0.25
14	エジプト 3.07		オマーン 3.00		0.14
15	オマーン 2.86		エジプト 2.93		△ 0.14
16	チュニジア 2.79		UAE 2.90		0.38
17	イエメン 2.64		ジブチ 2.74		0.54
18	UAE 2.52		バハレーン 2.52		△ 0.97
19	アフガニスタン 2.48		スダン 2.47		0.05
20	スダン 2.42		サウジアラビア 2.08		0.24
21	シリア 2.31		イエメン 1.95		△ 0.69
22	ジブチ 2.20		リビア 1.95		0.01
23	リビア 1.94		イラン 1.95		0.01
24	イラン 1.94		シリア 1.43		△ 0.88
25	サウジアラビア 1.84		アフガニスタン 0.32		△ 2.16

出所:EIU, *Democracy Index 2010* 及び *2021*.

注:表中の順位(1-25 位)は2010年の指数に基づく。

こうしたモロッコの政治的安定性については従来、現在に連なる王権が 17 世紀のアラウィー朝以降、途切れることなく続いてきた点が重視されてきた。のみならずシャリーフ（ムハンマドの血統）としての立場を有するスルタン（王）が、支配される側のバイア（忠誠の誓い）を受けるというイスラーム的正統性が確保されてきたことも、現在の政治的安定性をもたらした要因とされてきた。しかしながら金子氏は、以下の事実を踏まえてこの点に疑問を呈する。

- ✓ 1912 年以降に国土の大部分がフランスの保護領と化すまで、アラウィー朝の支配域は宗教的にはイスラームによって統合されていたものの、政治的にはスルトンの支配が及ぶ「マフゼンの地」とそうした支配を拒否する「シバの地」に分断され、「シバの地」ではスルタンが住人からバイアを受ける関係は成立していなかった。
- ✓ シャリーフであるスルタンへの反乱やクーデタが、やはりシャリーフである有力者によって主導されていた例には事欠かない。

かかる反証の存在にもかかわらず、王権の継続性やイスラーム的正統性の確保が過度に重視されてきたのはなぜか。金子氏は、従来の研究が「アラブ・中東・イスラーム」といった側からの接近に偏っていたことを指摘する。そしてフランスを中心とした植民地勢力側の視点に加え、「シバの地」住人の大宗を占めるベルベル人とその社会に注目していく。

こうして本論文第一の関心対象となったベルベル人は、伝統的にモロッコ人口の半数以上を占めてきた多数派であり、そうした事実のみに基づいても、より早くから重点的に分析されてしかるべき存在であった。その意味でも金子論文の視座は、斬新かつ独自性に富むものとなっている。

権力との直接的関わりという枠組みでみたとき、「アマーズィーグ」（自由なる民）を自称するベルベル人は、権力を受け入れた上で、その干渉・介入を嫌う立場であった。この点が、権力を手中に汎アラブ主義や積極的中立主義という理想の実現を図ろうとした急進的アラブ民族主義勢力との違いであり、ある意味で非政治的なベルベル勢力が国民の過半を占める状況は、変革期のモロッコに漸進的改革の余裕を提供するとともに、現在の政治的安定基盤を準備することになったというのが、金子論文から導き出される結論である。

現在においても天水依存型農業の可能な地が存在するという恵まれた環境下、「自由民」であるベルベル人は、部族間の関係においても独立的、自立的な伝統を維持し、集

団としての拡大に駆られる必要に乏しかった。これは権力を巡る争いにも節度をもたらし、そうした環境与件に乏しい他の中東地域の少数派とは異なる姿勢をベルベル勢力にもたらしめた。他方でモロッコの大部分を支配した宗主国のフランスが、ベルベル勢力を利用して権益の維持を図ろうとし、アラブ勢力の中からもそうした枠組みでの漸進的変化を受け入れる現実性が出たことで、モロッコには政治的安定の基盤が築かれていく。

金子論文はアマーズィーグとしてのベルベル人の姿勢のみならず、フランスやアラブ急進派とベルベル勢力の駆け引き、そしてそうした最中に出来た様々な偶発的要素といった点にも十分な配慮を示してまとめられた好論である。

## II 論文の構成

本論文は、以下の構成をとっている。

### 序論

1. 問題認識
2. 先行研究の整理
  - 2-1 王朝の正統性・権威
  - 2-2 イスラームと慣習法
  - 2-3 民族主義運動
  - 2-4 旧宗主国側から見た考察
3. 本稿の視点と目的について
4. 仮説
5. 考察の方法と構成

### 第1章 モロッコにおけるベルベル人

- 1-1 領域と人口構成
- 1-2 ベルベル人の歴史と宗教
- 1-3 ベルベル語方言と多数の独立した部族社会
- 1-4 アラブ人とベルベル人の関係
- 1-5 モロッコにおけるベルベル民族運動
- 1-6 クルド人との比較

### 第2章 保護国化以前のアラウィー朝統治

- 2-1 シバの地（不和の地）とベルベル人

## 2-2 20世紀初頭の相次ぐ反乱・クーデターとベルベル人

### 第3章 保護領下の体制

#### 3-1 シバの地の平定

#### 3-2 慣習法とベルベル勅令

#### 3-3 保護領統治体制

#### 3-4 保護領体制におけるベルベル人有力者

### 第4章 民族主義運動、反植民地運動と独立への過程

#### 4-1 アブドゥルカリームのリーフ戦争（1920-26）

#### 4-2 ベルベル勅令と民族主義運動

#### 4-3 反植民地運動と新たな対立

#### 4-4 ムハンマド復位から独立へ向けた動きと各政治勢力の立ち位置

#### 4-5 ムハンマドとイスティクラール党の関係

#### 4-6 ベルベル人であることと政治行動

#### 4-7 民族主義運動・反植民地運動におけるバイア、シャリーフの効用について

#### 4-8 独立への過程に関する論点のまとめ

### 5章 結論

#### 5-1 宗教的正統性による権威について

#### 5-2 ベルベル人の立ち位置と帰属意識

#### 5-3 アラブ・ベルベルの民族対立

#### 5-4 まとめ

おわりに

図表

注

参考文献等

### III 論文の内容

序論では、先行研究の整理とそこから導き出される疑問、そうした疑問に応えるため

の仮説が提示される。

先行研究は 17 世紀以降の王権の継続性と、その下で「シャリーフ」（ムハンマドに連なる血統）性を有する王と、支配される側の大衆が「バイア」（忠誠の誓い）によって結ばれているというイスラーム的正統性が確保されてきたことに、モロッコの政治的安定の起源をみてきた。しかし王に反乱する側が「シャリーフ」であった例は珍しくなく、また、王の支配域は宗教的には形式上、イスラームによって統合されていたものの、政治的には「マフゼンの地」（王の支配域）と「シバの地」（王の支配が及ばず税の支払いにも応じない地域）に二分されていた。

こうした「シバの地」の住人はほぼベルベル人であり、現在に連なるモロッコの政治的安定を考える上では、「アラブ・中東・イスラーム」という枠組みを重視する先行研究を超えて、ベルベル人こそが分析の中心に据えられる必要が強調される。

続く第 1 章は、そうしたベルベル人とその社会についての説明である。ここで明らかにされるのは、ベルベル人が基本的には部族を単位とした自立的、独立的な生活を志向し、方言の差が大きく文字も持たなかったことから、部族間では意思の疎通さえ困難という状況にあったという点である。

アラブ人の進出を受けたベルベル人のイスラーム化も、土着の宗教意識と親和性を持つ聖者信仰や神秘主義的なイスラームへと結実し、そうしたイスラームを異端視するアラブ社会とは別の世界であり続けてきた。結局、イスラーム化された空間の内部では、宗教や宗派、民族を異にする集団が多元的に共存する状況であり、モロッコでは宗教と政治、社会のイスラーム的一元化が不完全な形でしか成立しなかった。

第 2 章では、保護領化以前のアラウィー朝による統治が取り上げられる。

同朝の支配域ではスルタンの支配を受け入れないシバの地が存在し、その住人がスルタンとバイアの関係に入ることはなかった。もっとも税の支払いを拒否するシバの地の住人にはベルベル人のみならずアラブ人も含まれており、他方で強制的な徴税を企図するスルタン側の軍事行動がバイアの関係にあるアラブ人の全面的な支持を得られるわけでもなかった。ベルベルかアラブかは大きな問題とはなっておらず、とどのつまり住人は、自身の直接的帰属対象である集団の利害に従って行動するのが通例であった。

こうした点はスルタンがシャリーフであったとしても変わりはなく、その意味でシャリーフの効用が存在したとはいえない。事実、19 世紀末～20 世紀初頭の政治的混乱期には、シャリーフであるスルタンに、やはりシャリーフである王族が反乱を起こすという事態も一度ならず発生している。

第 3 章ではフランスとスペインによる保護領化を材料に、そうした国内の政治的分断

がどう変化したかが活写される。

シバの地の平定は仏西両国によって進められたが、スルタンによるアラブ・イスラーム的一元支配を嫌ったベルベル勢力はむしろ、そうした動きに好意的であった。とりわけフランスは、ベルベル勢力に慣習法の維持を認めて優遇し（ベルベル勅令）、民族主義的アラブ勢力に対抗しようとした。ベルベル勢力にとってこうしたフランス流の分断統治は、スルタン支配からの自由、すなわち、これまで同様の自治的空間が維持されることを意味した。

その意味で保護領化は、宗教的のみならず政治的にもモロッコの統合という事態をもたらした一方で、その内部では多元的共存社会という特徴を一層強化したといっている。

第4章では、自治的空間を維持しようとするベルベル勢力の動きが、反植民地闘争（リーフ戦争）やスルタン廃位運動等を材料に分析される。

単純化していえば、宗主国としての権益を固執する仏西両国、民族主義的反植民地闘争を主導することで、自集団を核とした一元的支配の実現を企図するアラブ民族主義勢力、一元的支配の拒否を第一義に合従連衡の姿勢をとるベルベル勢力といった構図の中、それぞれの既得権に配慮する妥協が成立し、それが現在に連なる穏健かつ漸進的な政治的枠組みに基盤を提供した。

いうまでもかかる政治的枠組みは、多元的共存社会というモロッコ的性格の維持に繋がった。

第5章は、以上の分析を要約のうえで結論を導出している。それによれば第一に、社会的統合や権力の正統性確保という意味で、イスラームが大きな役割を果たすことはなかった。第二に、アラブ・イスラーム王朝による緩やかな支配が成立して以降、人口の過半を占めるベルベル人を中心に、「アラブかベルベルか」や「正統派イスラームか神秘主義的イスラームか」といった単純かつ明確な分断は回避されて社会の多元性が維持され、それが独立後の政治的安定には有益であった。権力の干渉や介入は嫌うものの、自治的空間が維持されるかぎり権力自体を拒否することはなかったベルベル人が、この面で果たした役割は大きい。

「おわりに」で本論文は、今後の課題に言及している。それによると、半ば通説化していた先行研究の成果に多角的に挑んで修正点を導き出したものの、そうした点を一次資料を通じて実証していく作業は手つかずのままであり、それが今後の課題である。

#### IV 論文の評価

##### 1 博士号の申請まで

学位申請者である金子直也氏は、平成 31 年（2019 年）4 月に本学経済学研究科博士後期課程に入学後、修了に必要な単位を修得のうえ、外国語（英語）検定試験に合格した。

「アラブの春以降のモロッコ社会の安定に関する考察～なぜ、テロによる被害が比較的軽微なのか」（修士論文 2019.3）でモロッコの政治的安定性の解明を目指した金子氏は、博士課程ではこうした興味を、「オスマン帝国進出時のマグリブ地域の情勢～モロッコに支配が及ばなかった背景と要因」（学内研究発表会報告 [2019.10.17]、『経済学研究』[第 47 号 2020.3]）、「保護国化に至るアラウィー朝の統治状況」（学内研究発表会報告 [2020.10.15]、『経済学研究』[第 48 号 2021.3]）という形で深化・拡大させた。

今回の審査に提出された論文は以上を基盤に、先行研究の成果に修正を加えようとするもので、令和 3 年（2021 年）8 月には地中海学会の研究会においてその概要が提示され（論題「モロッコにおける国民統合～ベルベル人の帰属意識」）、そこでの質疑も踏まえて取りまとめたものである（なお研究発表の概要は、『地中海学会月報』（第 444 号 2021.9）に掲載された）。

## 2 審査委員会の設置と論文審査

金子氏の博士号申請は 5 月 14 日に受理され、同月 20 日の経済学研究科教務委員会による審議を経て同月 27 日、経済学研究科委員会が受理を正式に承認した。以後、3 名で構成される審査委員会（主査 立花亨、副査 森伸生名誉教授・松井謙一郎教授）が設置され、以下の通り、論文の審査を進めた。

7 月 28 日 第 1 回審査会  
10 月 13 日 博士論文発表会  
10 月 28 日 修正稿提出  
11 月 10 日 最終審査会（口頭試問）

初稿を基に行った第 1 回審査会では以下の意見・注文が出され、金子氏は主査の助言・示唆を受けつつ、新たな文献調査を基に加筆するとともに、叙述・視点・論理展開の精緻化を図った。

- ✓ 先行研究の多くが、350 年以上に亘って継続してきた王朝とその下でのイスラーム的な権力の正統性確保のための要素（バイア及びシャリーフ）に過度に注目し、ベ



ルベル人の役割を過小に評価してしまった要因は、一層詳しく説明する必要があるのではないか。

- ✓ ベルベル人への注目という新視点を十全に活用するため、ベルベル人集団を含めたモロッコの社会構造上の特質を提示するとともに、そうした特質を中東域内の他の国と比較することが必要なのではないか。
- ✓ 部族ごとに言語が異なり独立的色彩の強かったベルベル人が、独立の過程で極論に流されることなく、穏健かつ現実的な政策を採用した経緯や、独立後にはアラブ化を受け入れて国政の安定化に寄与した背景を、政治的観点のみならず、社会や意識の構造に遡って摘出することはできないか。
- ✓ 付随してモロッコのベルベル人社会は、北部と中部・南部に二分できるとされるが、その点は背景を含めた解説があると親切である。
- ✓ 中東でモロッコは特殊なのか、あるいは偶然的要素の積み重ねによって他の国とは異なる安定性を確保しえたのか。少なくとも中東域内他国との比較という視点を導入し、視座の普遍性を高める必要があるのではないか。
- ✓ モロッコ独特の用語法（例えばスルタンとカリフ、イマーム等）については、標準的な用語法と対比しながら解説を付したほうがよい。
- ✓ 外国語文献表記における句読法は、統一のうえ標準化すべきである。

10月28日に提出された修正稿は以上に対応したものであり、11月10日には最終審査が行われ、提出論文は博士号にふさわしい業績であると認められた。

### 3 審査所見

惰性的に中東・イスラームという枠組みを重視しがちだった先行研究を批判的に検証し、人口でいえば過半を占めていたベルベル人が半ば分析の射程から抜け落ちているとの疑問に立ち至った点が、まずは評価できる。そのうえでベルベル人側の事情にとどまることなく、彼らを植民地統治に利用しようとしたフランスとスペイン、そしてそうした現実に対応を図った国内各勢力の状況を含めて、多角的に問題への接近を試み、この分野に新たな地平を拓いた点が、さらなる評価の対象である。修士論文以降、粘り強く問題意識を深化させ、また更新してきた努力が実ったといえよう。

本論文では、ベルベル人とアラブ人がそれぞれに向けた興味深い俚諺が紹介されている。

- アラブ人を評するベルベル人側俚諺  
「一人だけで真の人間らしく生きているのが、ベルベル人、羊のように群をなして生活しているのがアラブ人」
- ベルベル人を評するアラブ人側俚諺  
「凶暴な動物のように誰とでも戦うのがベルベル人で、人間らしく、互いに連れ立って生きていくことの方を好むのがアラブ人」

権力による干渉と介入は嫌うものの、権力を拒否することではなく、また、それを求めることもしないベルベル人の存在は、社会の多元性維持を通して、各勢力間の利害調整と妥協を旨とする穏健かつ漸進的な政治に道を拓いたことは明らかである。この点は、かつては民主主義の手本視されたイギリスに、権力ではなくそれからの自由を求める同様の勢力（ジェントリやヨーマン）が存在していた事実とも符合している。そうしたいわば伝統的意味の自由主義者（リベラル）に焦点を当てて、政治的安定の枠組みを新たに読み解く試みは、金子論文を起点とした発展型とも位置づけられよう。同じ言葉を使いつつも、権力の掌握とそれを背景とした分配の主導権を志向する非伝統的な自由主義者（リベラル）が増えつつある現在、金子論文の意義は中東を超えた広がりさえ有している。

これまでの努力をかける形に結実させた金子氏は、博士号にふさわしい成果を上げたと確信する。

#### 4 審査結果

厳正かつ慎重な審査の結果を踏まえ、審査委員会は一致して、学位申請者である金子直也氏に、「博士」（経済学）の学位を授与すべきであると判断した。

以上